

孤独や不安をこえ、つながりの先にあるもの ——

2025年の春、岡山県瀬戸内市で過ごした「保養」の記録



「保養」とは、放射線量の高い地域を離れ、一定期間、心身の回復を図るための取り組みを指す。

福島第一原発事故をきっかけに岡山に母子で避難移住した蝦名字摩は、2011年に「せとうち交流プロジェクト」を立ち上げ、翌年から保養を行っている。事故から14年が経った現在も、放射能汚染のある地域で暮らす子どもたちにとって「保養」が必要とされている現実は、必ずしも広く知られているわけではない。

放射能汚染への不安のなかで孤立しがちな母親たちと、その隣で、自由にありのままに過ごす子どもたち。長く現場に関わってきた渡辺嶺也監督は5泊6日の記録を通して、「保養」がもたらす回復とつながりの時間を静かに映し出す。



—— 保養、それは生きていくための権利

〈作品の背景〉

原発事故による放射線被ばくの影響は、たとえそれが微量であったとしても免疫が正常に機能しなくなるなど、健康のバランスを壊し、さまざまな症状を引き起こすことが分かっている。2014年に東京の小平市から岡山に移住した三田茂医師は、それを『能力減退症』と名付けた。1986年のチェルノブイリ原発事故の罹災国であるウクライナからも、同様の報告書が発表されている。

「保養」とは、放射能下で暮らす人々にとって生きていくための権利であるが、「せとうち交流プロジェクト」をはじめ、保養への公的な支援はいまだにほとんどなく、市民で支えているのが現状である。

渡辺嶺也 [監督]



桜匠館 神崎建設・建築資料館
168-0065 5 杉並区浜田山 4-10-8

- 京王井の頭線「浜田山」駅 徒歩7分
 - 南北バス「すざ丸」
けやき線（阿佐谷～浜田山）
「浜田山小学校」バス停下車 徒歩5分
- お問い合わせ
03-3397-1111 (木下、栗原) ()
<https://kanzaki-architects.com>



お車でお越しの方は近隣パーキングへの駐車をお願いいたします。